

生きて

理想と現実 実績不足 出版断られる

自己資金ゼロで起した会社でしたが、今考えると恥ずかしくなるほど理想を高く掲げていました。まず、起業の動機となった「文化不毛地帯」という広島イメージをなくすことを一つの目標にしました。

当時は高度経済成長期。社会にはびこる科学技術や実利優先の風潮に対する反発を含め、「大地に自然、心にロマン」というキャッチフレーズも作りました。そうした思いを込め、取り扱うジャンルも歴史、文学、思想に絞ることにしました。

地方の出版社は首都圏に比べ、運搬や営業費、効率性が不利ですが、「東京に負けない本を出す」と意地になっていった面もありました。

しかし、そうした理想はすぐに打ち砕かれました。1975年の設立直後、本の執筆を頼もうと、母校広島大のある歴史学の先生を訪ねたところ、「名前も実績もない所から本など出せない」とけんもほろろに断られたのです。現実を知った瞬間で



1980年代前半の社屋で。右が木村さん

溪水社社長 木村逸司さん(1942年～) ⑩

書の翻訳本を出してくれた丹藤浩二君は、大学時代の後輩で、良き飲み友達でもありました。実は、私が1位を取った中国新聞の高校文芸誌コンクールで2位だったのが彼で、基町高(広島市中区)の生徒でした。後に福山大の教授になるのですが、本を出してくれた当時はまだ大学院生だったはず。それなのに、自費出版に近い形で協力してくれました。

わが社初の出版物となった「パッハ、インヴェンションとシンフォニア」も、「現代日本文学の旗手たち」という評論集も自費出版でした。それぞれ著者とは、文化評論出版社時代から懇意にしてくださいっていた広島大教育学部の野地潤家先生の紹介で知り合いました。

先生自身もこの年、「柿沼葉」という歌集を自費出版してくださいました。先生が広島高等師範学校(現広島大)の学生だった頃、家庭教師をしていた少女をしのぶ300首の挽歌でつづられていました。彼女は、原爆で亡くなりました。

負債拡大 高利貸からも

苦境

具体的な経営計画もないままでの起業でしたから、初年度の出版点数にも確固とした目標などありません。しかし、年間6点ではさすがに厳しい。20点はないと経営的には成り立たないのです。

開業後すぐに、運転資金を確保する金策にも走りざるを得なくなりました。金融機関に頼める当てもなく、頼れるのは、やはり知り合いだけでした。広島大時代の恩師の松元寛先生や、後に広島女学院の学院長になる片柳寛先生ら9人の方々が増資の名目で応じてくださいました。開業から半年後の1975年8月、150万円集まり、最初の危機を乗り切りました。

初年度は結局152万円の赤字だった。単年度赤字は翌年度からも5期連続続

出資依頼や借金はその後も続き、経営が楽だったことはありません。80年には、ついに呉市焼山の持ち家を売ることになりました。しかし、それ以上に苦しかったのは、創業10周年を乗り越えたばかり



銀行からの借り入れも止められ、最も苦しかった頃

溪水社社長 木村逸司さん(1942年～) ⑪

の86年からです。土建業を営んでいた高校時代の友人が、300万円の融通手形の不渡りを出したのです。その友人は、わが社が苦しい時にお金を貸してくれたので、私もできる時は貸していたのです。

これだけならまだ良かったのですが、彼は広島県から林業関連の資金185万円を借りていました。また、広島県信用保証協会を介して銀行にも834万円の借金があることも分かりました。私はそれらの保証人も引き受けていました。協会への肩代わり返済が完了するまで、わが社も銀行や信用金庫からの借り入れは停止されてしまいました。

91年度、負債総額はついに1億200万円まで膨れ上がり、6千900万円の売上高を大きく上回った

この時も無理を言いつつ多くの友人、知人、親族にお金を貸してもらいました。ですが、わが社と友人の二重の借金返済、さらに、銀行との取引も閉ざされた状況では、とても追い付きません。

ついに高利貸からも300万円、借りざるを得なくなりました。年30%という、今では考えられない金利でしたが仕方ありません。正直、わが社もこれまでか、と思いました。

資金の提供 出版勧誘も

救いの手

高利貸からの借り入れで、資金ショートはひとまず回避できました。しかし、返済期日が迫ると、また別の業者へ借り、前の業者に返す綱渡りのような状況に陥っていました。結局、1991年は利子だけで1100万円支払いました。いつ終わるともしれぬ借金地獄を考えると、3人の子どもの顔も浮かび「親としての責任が果たせるのか」と悩むこともありました。

押しつぶされそうな重圧の中、耳を疑うような話が舞い込んでくる。広島女学院の学院長だった片柳寛先生が「退職金から1千万円を寄付したい」と声を掛けてくださったのです。片柳先生は創業直後からの株主で、長年わが社のことを気に掛けてくださっていました。しかし、そんな大金を頂くわけにはいかず、貸していたことにしました。

でも、おかげで高利貸から借りた元金と利子の全額を1年余りで完済できました。「あのお金がなかったら」と思うと、今でもぞつとします。



物心ともに支えてくれた野地先生

溪水社社長 木村逸司さん(1942年～) ⑫

高利貸からは解放されたが、広島県信用保証協会への肩代わり返済はなおも続く。銀行や信用金庫からの借り入れはできないままだった

知人、友人への借金の依頼は続けざるを得ませんでした。心苦しさを感じつつ話を切り出すと、数百万円使えるクレジットカードをそつと差し出してくれる高校、大学の先輩、友人もいました。

創業当初から小中高校の国語教育に関する研究などを自費出版してくださった広島大の野地潤家先生は、毎年年末になると「300万円ぐらいならいつでも用意しているから」と連絡してくださいました。

「国語教育の溪水社」と呼ばれるようになるきっかけをつくってくださったのも野地先生です。全国大学国語教育学会理事長を務めたこの分野の権威で、全国に散らばる教え子にも、わが社での出版を勧めてくださったのです。おかげで国語教育学の本は計297点に上ります。

そして、76年の結婚直後から、長年寝たきりだった母の世話や、子育てを一手に引き受けてくれた妻正子にも大いに助けられました。

信用保証協会への返済が完了するのは2002年。ようやく銀行などからの借り入れが再開された

生きて

生きて